

東陽病院内科医師

鈴木健士

健康ウォッチング

横芝町の皆さんこんにちは、暑い夏も終わり秋になって来る頃かと思いますが、今回はこれからの季節に多い子供の発熱（風邪）についてお話したいと思います。

子供は生まれて4〜6か月位まではお母さんの免疫（外界の菌などに対する抵抗力）を受け継いでいます。ですからお母さんがであったことのあるウイルスなどには普通発病せず、もちろんあまり外に出る機会もないこと、ひきません、しかし生後6か月を過ぎる頃からお母さんの免疫が切れるため、今後は自分の力で抵抗力をつけなければならぬとなります。

子供の発熱（風邪）について

持つお母さんは慌ててしまっても無理のないことですが、これから外界の病原体に対する抵抗力をつけ、強い体力を作っていくためには必要な経験と言えるのかも知れません。しかし経験といつてもその病気で重症になつてしまつては元も子もありませんので、いくつかの注意すべき点を知つて頂きたいと思つています。

外来にかかる時に熱を大変心配される方が多いようです。特にお子さんはかなり高い熱が出る事が多いのですが、熱よりもむしろお子さんの場合は「元気があるかどうか」ということを注意された方がよいと思つています。40度の熱があつても元気にしているお子さんよりも、たとえ熱がなくともぐったりとおもちゃで遊ばないお子さんが心配です。特にお母さんが「いつもとぜんぜん違って元気がない」と感じる状態を注意すべきだと思

います。もちろん熱があれば多少は元気もなくなり、食事も減るものですが、お母さんの「いつもと違う」という感覚は大切にすべきだと思つています。ただし体温が重要でないという意味ではありませんで念のため、5才頃までのお子さんは高い熱があると熱性けいれんというけいれん発作を起こすことがありますので、38.5度以上の熱があれば解熱剤の坐薬などで熱を下げた方が良いでしょうと思つています。

また食事がとれないというのも心配と思つていますが、お子さんの場合水分がとれていればとあえず大慌てはしなくて良いかと思つています。水分がとれば1から2日では栄養失調にはならないものです。ただし水分がとれないときはお子さんはすぐ脱水になつてしまいます。特に熱のある時はなおさらです。その時は点滴や入院を考慮するケースもあるかもしれません。お母さんが慌てると子供は敏感に感じ取つて緊張してしまふものです。慌てずによくお子さんを観察し、心配な際はお気軽にかかりつけ医にご相談ください。

「母親学級」を開催します
日時 10月27日(金)午後2時
場所 東陽病院産婦人科外来
対象 制限はありません

文芸

俳句

秋茄子を隣の嫁に貰ひけり 浅野 茂子

藤椅子に寝息小さき人のあて 伊藤 敬子

灯を消せば一人も楽し遠花火 池田 逸子

秋風の馳せくる宵の独り酌 岡田 雅美

文月の海に向けたる机がひとり 勝又 和徳

天測の郷土の偉人蟬時雨 向後 寛

ねこじゃらし風のダンスを踊りけり 鈴木 繁子

冷しそば杉のほひの箸を割る 土屋 栗水

干し竿のとんぼの去るを待ちにけり 藤代 ゆう

オカリナの妙なる調べ里の秋 渡部 和秋

入賞の一句を得たり鬼城の忌 選者 鈴木 草庵

短歌

あたたかき土の恵みを知らぬまま 甕の鈴虫ひたに鳴きつぐ 佐瀬 初音

口紅もこく塗り出番待ちてあつ フラダンスいま発表せむと 池田 春江

汗だくの軀休める傍らに 紫淡く胡麻の咲きあつ 宇井 ちい

突然に君逝きませり教へ子の 高校生等声あげ泣けり 西山満里子

生雲丹をたつぷりのせし鮎を食ぶ 焼尻島の小さき店に 押尾 輝子

新葉の香りが風に乗りて来ぬ コンパインが今刈れる稲より 鈴木 やす

潮の香のかすかに届く朝市に 藁にたばねし小松菜かひぬ 渋谷 静子

友人と出掛ける度に語りあふ 歩ける事の何と仕合せ 石井 ユク

遠花火林をへだてて見てをれば こだまのやうな音の聞こゆる 永藤 滋

椎森を渡りて風のさやぐ中 高鳴く蟬の声の透りく 萩原 信一

成田山に詣でしときに求めたる この糸通し宝と使ふ 秋葉 とく

夕暮れの座敷に鉢を運び待つ 咲く気配みす月下美人を 選者 斎藤つね子

